

2021年度しあわせ研究

薬師寺・佛足跡歌碑の研究II

一碑面下半部に刻された書と
その内容について

研究員 廣瀬裕之、漆原徹
遠藤祐介



薬師寺・佛足跡歌碑前にて (2021年) ▲

本論考は、武蔵野大学「しあわせ研究費」採択による上記3人の共同研究の成果発表であり、第5回目の研究論文である。「中国仏教の日本への受容」というテーマで調査を継続し書道学・歴史学・仏教学から考察を加えてきた。2017年度は薬師寺佛足石「正面銘文刻」、2018年度は同「左側面銘文刻」、2019年度は同「背面銘文」の調査研究を行い完成させ、2020年度からは、新たにその隣に存在する同じく国宝の「佛足跡歌碑」碑面上半部の研究を着手し、それぞれ『武蔵野教育学論集』第4・6・8・10号に研究論文として発表してきた。2020年度からは、コロナ禍のため、現地での調査研究が危ぶまれたが時期を検討して探訪し、2021年度も「佛足跡歌碑」研究を現地において継続することが出来た。昨年までと同様に拓本と原刻および写真による照合調査から書線の確認・検討を行い、今回は碑面下半部に刻された銘刻の書としての正確な復元および判りやすい訳とその背景の研究をすることが出来た。お蔭様で薬師寺における佛足石関連の調査を開始して5年目となる。今回佛足跡歌碑の調査研究のため、薬師寺を訪問すると、宝物研究担当の方が薬師寺境内の礎石についてご案内くださり、さらに、東塔の屋根の最頂部にあり、今まで見ることも見えなかった東塔水

煙の実物と東塔擦銘の実物を実際に間近で拝見させていただき、感激と感謝の気持ちで一杯であった。私たちの研究論文をよくお読み頂いておられるとのことで、今回も薬師寺の応接室でいろいろな意見交換ができたことが喜びであった。今回は、その方と同行のもと、原碑刻面調査ができただけでなく、碑面の写真撮影も許可して頂けたご厚意に深く感謝したい。

古代の薬師寺佛足石以外の佛足石については、従来近世以降のものしか存在しないという理解が一般的であり、私たちはその間の時代、つまり近世になる前（中世）の佛足石探しも大きな研究テーマの一つとして引き続き進めてきたが、今回も京都・奈良周辺を探訪した結果、中世のものとは推定できる新たな2つの佛足石の存在を発見することができた。前回までの研究で、中世の佛足石が京都法然院、安土城、大阪府泉南市林昌寺・京都の安楽寺と銀閣寺にも存在することを確かめてきたが、本年度は、大阪の四天王寺と京都の清水寺に存在する佛足石も寺院の人さえ知らない中世の佛足石であることが判明したことが今回の調査探訪の大きな成果であった。

薬師寺佛足跡歌碑の銘文は、和歌としてだけではなく、万葉仮名の実物としても有名である。その復元によってこの書美を忠実に再現することができたことも大きな成果といえる。私たちの共同研究は従来の研究を着実に前進させているといえよう。本成果は、『武蔵野教育学論集』第12号（2022年3月刊行・武蔵野大学教育学研究所発行）に掲載する。今後も仏教を中心とした文化の研究を更に推し進めていく所存である。